

鳴海 要吉（なるみ・ようきち）

1、プロフィール

大正3年ローマ字版詩集『TUTI NI KAERE』を刊行した後、口語短歌誌「新緑」を創刊して口語短歌の普及に努め、「新緑」廃刊後は童話の創作に打ち込んだ。

<生没>

1883(明治16)年7月9日 ~ 1959(昭和34)年12月17日

<代表作>

ローマ字版詩集『TUTI NI KAERE』

日本字版詩集『土にかへれ』『歌を作る人へ』

<青森との関わり>

南津軽郡黒石町(現黒石市)出身。明治40年から42年にかけて、下北郡の佐井村および東通村田代で教員を勤める。

2、作家解説

口語歌人鳴海要吉の作品の中でもっとも愛唱されているのは、「あきらめの旅ではあった／磯の端末(さき)の／白い燈台(とうだい)に／日が映(さ)して居た」という作品であろう。これは詩集『土にかへれ』の巻頭に収められている作品だが、この詩集は大正3年に刊行されたローマ字版と大正14年の日本字版とがある。

さらに、日本字版の方には島崎藤村が序文を寄せている。藤村は序文の中で「『土にかへれ』は長く読まれていゝ詩集である。極めて単純なやさしい言葉をもって、私達の奥に潜む精神の光景を指摘して見せた詩集である。永久に若い青春の書の一つである。」と書いている。

ところで、13歳の年、経済的事情で黒石高等小学校を中退した要吉は、失意の底で隣家の少女吉田すまに想いを寄せた。この吉田すまへの思慕が要吉文学のモチーフの一つである。要吉はその想いを明治38年、「吾が胸の底の茲」と題

する 56 首の短歌に結実させたが、この当時既に「今言(いまげん)短歌」と称して、口語短歌の試作を始めていたのである。

その後、要吉は下北郡の佐井尋常高等小学校、東通村田代尋常小学校、さらには北海道の天塩国増毛尋常高等小学校、苫前尋常小学校に勤務したが、御真影に対する不敬罪に問われ免職となった。

大正2年 12 月上旬京した要吉は、「日本のろーま字社」に勤め、前述の、『TUTI NI KAERE』を出版、ローマ字と口語歌普及の活動を展開した。また、大正 15 年には、口語短歌雑誌「新緑」を創刊し、青森県内各地に支部が結成された。

晩年には「新生文字」(わびがな)の研究や童話の執筆に打ち込み、長編童話『土に立つ子』を刊行している。

3、資料紹介

○『TUTI NI KAERE』

図書

1914(大正3)年 12 月 12 日

149mm×100mm

Narumi-Uraburu の筆名で刊行されたローマ字版詩集。要吉の勤務先の「日本のろーま字社」から、「曙文庫」の第一巻目として刊行されたもので、収録作品の多くは東奥日報に発表したものである。

○『生(ライフ)の悲しみ 鳴海要吉の半生』(竹浪和夫著)

図書

1975(昭和 50)年 12 月 10 日

194mm×137mm

鳴海要吉の半生を評伝風に描いたもので、要吉の吉田すまに対する恋情の屈折や、漂泊の想いの本質に言及している。また、要吉の下北時代の生活を浮き彫りにした作品である。